

内村鑑三おぼえ書き(その八)

岩谷元輝

内村鑑三翁のロマ書注解について、三たび素朴な疑問を提出して道の人の教えを乞いたいと思う。標題に(その八)とした謂われを述べるなら、この内村研究は、約10年前、神奈川大学の人文研究誌に(その一)を載せたのが始まりである。当時神戸大学の教育学部長をしておられた塩尻公明先生に促されたのが契機となった。連載の進行中にも、先生の激励と過分なまでの賞讃が無かったら、果して内村鑑三という大きな名前の重さに耐え得たかどうか。一冊の本にまとめることを先生から強くお勧め頂いた頃、神奈川大学の高貴なる実存哲学者信太正三教授も、「御本になさるといいですよ」と懇ろな言葉を下さったが、折から起きた大学紛争という奇妙にして愚劣な騒ぎは、日本の大学教員の、警察アレルギーという世界に恐らく類例を見ない異常体質によって火に油を注がれ、周知の如き全国的規模で燃え盛り燃え狂い、いつ果てるとも知れぬ状況が展開される中で、奈良の生駒山の緑に囲まれた帝塚山女子大学において静かに道を説いておられた塩尻先生の突然の逝去、次いで信太教授も、大学の荒廃耐え難しとして退職されると、いくばくもなくして訃報が伝えられ、暗夜に灯火を失えるが如き思いの中に私の内村研究は(その七)一篇を書き加えたほかは格別の進展も無いままに今日に至ったところ、この度、はからずも、『城西人文研究』の創刊に際会し、求道の心新たに続稿を起して(その八)と付記すれば、(その一)以来、世の常ならぬ道を歩み来た感慨の中に、故先生、故先輩の学恩に対し、報謝の思いしきりである。〔この稿の初校終了の日が、故先生の墓碑建立の前日に当たったのも偶然とばかりは思わない。〕

1. 斯く我ら信仰によりて義とせられたれば

ロマ書第5章1節である。このあと「我ら主イエス・キリストにより、神に對して平和を得たり」と続く。翁の注解を見ると、

これは既説全部の反覆と見るべきものである。われらは信仰により義とせられた。すでに罪を許され義人として神に受け入れられたのであれば、これ即ち神と和らぐことを得たのである。そしてこの事たる、全く「わが主イエス・キリストによりて」である。彼とその十字架の犠牲によりてである。パウロは第4章までにこの事を詳細に説いたのである。(186頁)

パウロは果してこの事を詳細に説いたか。この第1節は果して既説全部の反覆か。翁の「反覆」は無論「反復」のことであろうが、この第1節を既説全部の反復と断定できる人の精神構造が私の興味をそそる。第4章においてパウロは、主としてアブラハムの信仰について語っており、その末尾において取ってつけたように一言主イエスに言及しているだけだ。「この事たる、全くわが主イエス・キリストによりてである」ことを、詳細に説くどころか、ほとんど何も説いていないではないか。最後につけ加えた一言を「取ってつけたよう」だと感じるのは私だけか。キリスト教徒でない人なら誰でも読めばわかる通り、アブラハムが義とせられたのは「イエス・キリストによりて」ではなかったのだから、第5章1節は既説全部の反復ではなくて「一部」の反復である。これは重要なことであるから、是非ともはっきりさせて置かねばならぬ。

さて、アブラハムの信仰を讃えることは、正統派キリスト教の教義の中の最も重要な部分、すなわち十字架のイエスを仰ぎ見ることによってのみ救われるという教えを否定することにならないか。十字架のイエスを仰ぎ見なかったアブラハムが模範的な信仰の人だったとすると当然十字架が必ずしもキリスト教の核心ではないことにならないか。このことに、パウロも内村翁も、(そして世のキリスト教徒の方々も) 気がついていないらしいことが私には実に奇妙不思議なことに思われてならない。アブラハムの信仰を模範的として讃えたのは、「律法によらず、信仰による」という事を主張する為であって、イエスの十字

架が救いに必要か否かを論じているのではない——というふうに説明することによって、ここの所を通りぬけるのが一般の聖書注解者のやり方であるらしいが、それは私の疑問に対する解答には少しもならないのである。

この事と関連して興味深いのは、内村翁に「代表的日本人」と題する著作のあることである。翁が倫理的立場から日本の偉人として仰ぎ見る人々の生涯を、あまねく世界の人々に知らせようという意図のもとに英文で書かれたものであるが、この著作の中に挙げられている日本人の中に、キリスト教徒は一人もいない。ということは、キリスト教を信じなくとも、仰ぎ見るに足る偉人たり得るということである。そして、このことは、やがてキリスト教無用論につながってゆきはせぬかという不安を私は兼ねてより感じている。パウロと内村翁がクリスチャンでないアブラハムを信仰の模範として讃えることが、取りもなおさずキリスト教無用論につながるであろうと考えるのと同様である。内村翁はアブラハム礼讃の場合とは違って、この私の不安と同様なものを、「代表的日本人」については感じたらしく、独乙語訳の序文には次のように書いた。

この書は現在の余を示すものではない。これは現在キリスト教徒たる余自身の接木せられている台木の幹を示すものである、云々。

翁のこの言葉を基として、翁のキリスト教受容の仕方を「接木型」として分類する学者がいる（武田清子氏「土着と背教」参照）。だが、話はここで終らない。翁は晩年の日記（1921年8月11日）の中でこう書いているのである。

英文「代表的日本人」改版の校正をしつつある。今日上杉鷹山の分を終わり、二宮尊徳の分を始めた。今より28年前にこの著をなしておいたことを神に感謝する。まことの日本人は実に偉い者であった。今のキリスト教界の牧師、神学者らといえども、遠く彼らに及ばない。米国宣教師らに偶像信者と呼ばるるとも、鷹山や尊徳のような人物となるを得ばたくさんである。余はある時はキリスト信者たるをやめて、純日本人たらんと欲することがある。

この日記は、独乙語版の序文を真向から否定することにならないか。ということの内村翁のキリスト教を接木型として分類することにも疑問を投げかけるものだということにもなる。ひいては翁自身によるキリスト教無用論の宣言

とも見られないこともない。

代表的日本人の礼讃は、勢い余ってキリスト教無用論の如きものとなった。だが、勢い余らずとも、異教の偉人の礼讃は、必然的にその中にキリスト教否定の萌芽を持つのではなからうか。代表的日本人の礼讃がキリスト教無用論の如きへと発展したのと同様に、代表的ユダヤ人たるアブラハムの礼讃も又、キリスト教無用論へと発展せずにはいないのではないか。

キリスト教徒とはそもそも何だろう、と、ここで又途方もなく大きな問題へ戻る。歌のリフレインのように、何度でもここへ戻る。

キリスト教徒とはキリストの教えによって救われた（もしくは救われたいと思っている）人の謂か。その人たちは、キリストの教えによってでなければ自分は救われないと信じているだろう。（パウロの教えはキリストの教えとは大きく異なっているが、ここでは便宜上それを問わぬことにする。）だが、その人たちが「人はすべて」キリスト教によらなければ救われないと考えたら、それは果して正しいか。アブラハムを讃え、代表的日本人を讃える人は、その考えが正しくないことを自ら証明しているのではないか。

「自分はキリスト教で救われたが、ほかの人のことは知らぬ」と言うなら、その限りにおいてキリスト教徒は正しいだろう。そこに止まる限り、異教の偉人を讃えることと讃える人自身のキリスト教との間に矛盾も衝突も無いかも知れぬ。パウロが、そして内村翁が、アブラハムを讃えたのはその心だったか。内村翁が1894年に代表的日本人を書きおろした時は確かにその心だったことは、その序文でわかるが、1921年の8月11日の日記を書いた時は、明らかにその心ではなかった。どちらが真の内村翁だろう。

翁の注解に戻る。

第2節は「またわれら彼（キリスト）により信仰によりて今おとところの恩恵に入ることを得、かつ神の榮を望みて喜びをなす」とある。第一は「恩恵」である。第二は「神の榮えを望みて喜びをなす」こと、すなわち希望の喜びである。これを第1節と合わせ考うれば、第一、義とせられて神とやわらぐこと、第二、恩恵に入ること、第三、希望の喜びを受くること、となるのである。（略）義とせらるるや恩恵を受け、さらに榮化の大希望を与えられて喜びおどる。これ一にイエス・キリストを信ぜしと

いう一事によるのである。彼の十字架のあるがために、ただ信仰のみをもって、この大なる特権と歓喜をわがものにするに至る。単なる信仰のみの故に——何ら功(いさおし)を立つることなくして——罪人の上にかくも恩恵を与えたもう神の愛の大なるかな!

「鷹山、尊徳のような人物となるを得ばたくさんである」とは「神とやわらぐを得ずともいい、恩恵に入ることを得ずともいい、栄化の大希望を与えられずともいい、そんなものは要らない」ということか。或いは又鷹山、尊徳らはこの三つを得ているというのか。恐らくそのいずれでもないだろう。もしそのいずれかだったら、キリスト教の存在意義は極めて稀薄なものとなってしまう。翁の50年の信仰生活と信条主張がゼロになる危険さえある。だから翁がそんなことを認める筈はない。とすると——。

やっぱり翁は「鷹山、尊徳のような人物となれば沢山だ」などと言ってはいけなかったのではなからうか。このことは、これからも繰り返して問題にすることになるから、ここではこの位にして、この注だけに限って考えてみよう。

神に救われし証拠は何であるか。ある人は事業の成功であると言い、自己の致富栄達をもって救われし証拠となす人々がある。信仰の結果として勤勉を生み、ために致富栄達に至る人が無いとは言えぬ。しかしながら詐偽と詭譎とを以って致富栄達に至る人もある。あるいは又幸運が成功をもたらす事もある。ゆえに救われし証拠をこの世の成功に置くは大体において誤っている。(194頁)

大体において? 「全然」ではないのか。最大級の言葉を好み、妥協を嫌う翁が、ここでは珍しくも「大体において」と柔軟な表現を用いた事は興味をそそるが、興味をそそるのはそれだけではない。「大体において」という語をここに使ったということで翁は翁の信仰の本体を、問わず語りの形で我々の前に示しているのである。「大体において誤っている」とは「少しは当たっている」ということであろうが、この世の成功を神に救われし証拠とする考えは、少しでも当たっているだろうか。イエスはどこかでそんなことを言ったか。「幸いなる哉」と歌うような調子で説いたあの山上の(ルカ伝によれば山麓の)説法でイエスに福祝されているのは、すべてこの世の致富栄達から外れた人たちである。天国はその人のものなりと保証された人たちは、世のいわゆる成功者ではなく

て、失敗者、敗残者である。神に救われた証拠はこれらの人々の上こそ現われることをイエスは明快に宣言しているのだ。「或人みもとに來りて言ふ。『師よ、われとこしへの生命を得る為には如何なるよき事をなすべきか』イエス言ひたまふ、『若し全からんと思はば、往きて汝の所有を売りて貧しき者に施せ、さらば財を天に得ん。かつ來りて我に従へ』」(マタイ19の21)。救われんと思うなら富を捨てよとイエスは言った。富める者が天国へ入るのは、らくだが針の穴をくぐるより難しいとイエスは言った。すなわち致富栄達は救われし証拠どころかその反対ではないのか。マックス・ウェーバーが何を言おうと、致富栄達は救われた証拠ではないことをイエスが明言していることを内村翁が忘れるわけはあるまいに、何を言い出すのだろうと訝りながら次を読むと、

さらば救われし証拠、また救いの完成の希望の確實なるを証する証拠は何であるか。これ成功にあらず、健康にあらず、その他いっさいの外部的徴証にあらず、心中深くいだかるるところの聖霊による神霊の実験である。(194頁)

「大体において誤りである」と言ったすぐあとで「いっさいの外部的徴証にあらず」と今度は外部的なしるしを全部否定した。「大体において誤り」ではなくて「全然」誤りだと強く否定してキリスト教本来の精神へ立ち返って下さって、まずは安心したが、このあとに続く翁の言葉は、又しても私をオヤと立止まらせる。

……神愛の実験である。われらに賜わりしところの聖霊により、神の愛ゆたかに注がれて今残ることを、如実に味いたること、この実験が最も確實な希望の証拠である。(194頁)

今残る？ 今は注がれていない？ クリスチャンの現在の心境はそのようなものか。翁のこの一言は、私にとって見のがし得ぬ重要さを持っている。内村翁を理解するための鍵の一つがここにありそうである。「過去に注がれて今残る」という言い方を翁は、この前後で何度も繰り返している。例えば192頁の注解では第5章5節を説明して

われらに賜りたる聖霊である。聖霊を賜りたることはクリスチャンにとりて過去のことである(もちろん現在を除外しないけれども)。そしてこの聖霊によりて神の愛

が心に注がれて今残っているのである。

と言っている。過去に注がれて今残っている。何だか溜り水のような。古くなっている感じである。これが翁の実感だったらしい。193頁でも

聖霊われらにくだりて、神の愛大水のごとく沛然としてわが心に注がれ、その愛が今もとどまっていることは、わが心における実験として、もとより疑い得ぬ事実である。

と言っている。沛然は大水を形容する言葉ではなくて大雨を形容する言葉だと思いが、そんなことはどうでもいい。とにかく過去に注がれて今残るという感じを翁は実感として持っていた。今も盛んに注がれているという実感は無かった。このことが翁の説法を私の胸の奥に届かせない最も大きな原因ではないかと思う。

神を人が見るのは「現在」の時ににおいてであろう。（私は神を見たことが無いので臆測で物を言うほかない。神を見たことのない男の臆測など無価値だと言うか。世の中に神という言葉をやたらに振り廻す人たちが、どんなに安手な人たちであるかを見たことがあるか。）神は常に「現在」の時にいるだろう。神を見たい人は、この世を捨てて「現在」の国へ行かねばならぬ。この現在の国のことを天国ともいうようである。「違う」と言う声が聞こえるが、聞き流して先へ行く。現在の国とは明日を思わぬ人の住む国である。この世は過去と未来の国である。罪は過去と未来に属する。アダムが罪を犯したということは、「現在」の国を捨てたということだろうと私は解す。神の愛を人が受けるのも、人が「現在」を生きている時だけである。その現在も、緊張がゆるめば忽ち過去となる。それに伴って神の愛も過去のものとなる。単なる記憶として存在を続けるだけになる。過去に受けた愛は、既に愛ではなく愛の記憶にすぎない。現在の愛に比べれば、冷えた残骸のようなものだ。愛は何より鮮度が重要である。（これは神の愛に限らない。人間の愛も同様である。女性が、その愛着する男性の口から、「我汝を愛す」という語を毎日でも聞きたがるのは、女性が愛の鮮度の重要さを知っているからである。「我汝を昨日愛せり」では女性は満足せず、「我今汝を愛す」と言わせてはじめて満足するのは道理のあることだ。Did you love me? という問いの如何に滑稽なるかを思え。）

翁の言われる「今も残っている愛」は愛の記憶であって「今受けつつある

愛」に及ばざること遠いものではなかったか。西田天香翁は「お光」を念々刻々頂いて、その導きによって生きた。天香翁の判断力が常に確かで、愛の心底知れずに深かったのはその為であろう。真に宗教的な生き方は、そのようなものであらうと私は遠くから推測する。天香如き邪教の小教祖など、例に引くにも値しないと人は笑うか。(笑う人に私は何度あったことだろう。知識人をもって任ずるその人たちの、痛ましいまでの痴鈍さを、私は何度悲しんだことだろう。——とはいえ、私とて、天香翁側(がわ)の人間ではなくて、その痴鈍な人々の側にいるもう一人の痴鈍な男としての自分自身を認めないわけにはいかないのだが)。笑う人たちは大むね事大主義であり、大きな名前を、殊にカタカナの名前を、持ち出せば笑わずに読んで呉れそうだから、思い切り大きなカタカナを持ち出してみよう。

(内村翁があれ程の名声をほしいままにし得たことの陰に、翁がカタカナと近接した所に身を置いた、という事がありはせぬかと私は疑っているが、これについては他日「日本人のカタカナ好きと内村鑑三」という文章で論ずる機会を持ちたいと思う。) 大きなカタカナ、雷名音に聞こえるアウグスチヌス、これなら不足はないか。これに更に権威の輪をかけて、キリスト教大辞典を引き合いに出せば完璧か。大辞典「恩寵」の項の土居真俊氏の簡潔な紹介によると、この、カトリック教の歴史の中に一きわ高くそびえ立つ巨峰の如き大聖者アウグスチヌスは、「聖霊によって愛の注入を受ける者は罪の奴隷たる状態から解放されて、善を行うことができるようになる。そのような恩恵は入信の初めにおいて与えられるのみならず、人間の善行を助ける為に引き続いて与えられる」という考えに立っていた。「引き続いて与えられる」と「今も残っている」とは大きな違いである。そしてこの違いが内村翁の聖書注解をはじめとする宗教活動のすべてに亘って現われているのではないか。そういう眼で内村全集を読むことによって、新しい発見がなされそうに思う。

過去に聖霊下り、その聖霊により神の愛が注がれて今に残ると言う翁は、義とせられた者に賜わる恵を次のように語る。

げに信仰によりて義とせられし結果として受くる恩恵は驚くべきものである。その事はこの恩恵を受けつつあるその人自身がたれよりもよく知っている。罪の苦悶はぬ

ぐうが如く失せ、心には言い知れぬ平和来り、天国をしのびて現世の患苦に耐え、天よりの生命を受けて確信をもって働く。われは全世界のすべての良き人と天使と万物と相融合するの境に入りしを感じ、万物ことごとくわがものなるを思うに至る。(188頁)

実に申し分のない境地だが、翁は果してこれを本当に実感していたか。翁の経歴と照し合わせて考えてみよう。

翁はいつ頃信仰を得て義とせられたのだろう。自伝「余は如何にして」によれば、1878年の6月、札幌で洗礼を受けたが、それは信仰とは殆ど無関係なものだったようである。「われわれは新しい主人たるキリストに忠誠を誓い、われわれのひたいには十字架のしるしが刻まれた。……ひとたび回心して信者となったわれわれは云々」(「余は如何にして」第2章)とあるが、その回心なるものは、実は回心したつもりになっていただけのことであったことは、のちにアメリカに渡ったあとの信仰上の懐疑に悩むくたりを見れば明らかである。罪の苦悶はぬぐうが如く失せ、心には言い知らぬ平和来り、というわけにはいかなかった。札幌以来のキリスト教は、翁自身の言葉によってさえ、「空虚な感傷的なキリスト教」だった。渡米後の1885年1月の日記には「祖国をヨーロッパ、アメリカのような強国にすることが私の生涯の第一の目的であり、そのもくろみを実現するための大きな機関と考えてキリスト教を歓迎したのである」と告白している。魂の救済の為ではなくて祖国を強国にする為のキリスト教だった。明治の開化期にキリスト教に近づいた人々の大半が、こういう動機を持っていただろうという推測を裏づける資料は少なくない。キリスト教に限らず、学問芸術その他すべてのヨーロッパ文化に近づいた多くの人々の心の底に愛国的情熱があったらしい。内村翁もそれらの中の一人、言い換えれば「時代の子」だったのである。(ちなみに、日本人が七世紀の昔に中国文化、特に仏教を受け入れたのも又同じ動機からだった。珍しい日本人のように見える内村翁は又、日本人らしい日本人でもあったのだ。)

ペンシルヴァニアにある精薄児収容所に看護人として生活した8ヶ月は、心中の懐疑との血みどろの戦いだった。その戦いに敗れ、懐疑に耐えかねた翁は、収容所を辞してニューイングランドへ行く。「場所を変えれば何か幸運が来る

だろうと考えたから」だった。「場所を変えれば何か幸運が来るだろう」と果敢ない望みを頼りに場所を変えるのは、翁が先に述べた「義とせられた人」の心境と相距ること万里である。

マサチューセッツのアマースト大学で三年次学生として地質学、鉱物学、歴史学などの講義を聴くかたわら、J・H・Seelye 総理(学長)の人格に触れることによって、初めて「天国への道」に近づきつつある自分を見出すことになるが、この年の3月8日の日記には、

わが生涯における極めて重大な日。キリストの罪のゆるしの力が今日ほどはっきりと啓示されたことは無かった。今日までわが心を悩ませていたあらゆる疑問の解決は神の子の十字架の上にある。キリストはわが負債をことごとく支払いたもうて、われを始祖の墮落以前の清浄と純潔に連れ戻したもう。今やわれは神の子であり、わが義務はイエスを信ずることである。彼のゆえに神はわが望むものをすべて与えたもうであらう。神はわれを神の栄光のために用いて、ついに天国においてわれを救いたもうであらう。

と書いた。「今やわれは神の子であり」——これは回心の高らかな宣言である。翁時に27歳。「始祖の墮落以前の清浄」「神の子」「イエスを信ず」「天国における救い」などの言葉の内容については吟味を要するとしても、この日にはじめて翁は、どうやら、自ら言われる如く、真の回心らしきものを得たかの如くである。

さて齡27にして真の回心をしたと自ら言う翁は、「罪の苦悶はぬぐうが如く失せ、心には言い知れぬ平和来り」という心境に入ったかという、決してそうではなかった。アマーストを卒業してハートフォード神学校へ入った翁は、「過ぐる3年間の激しい精神的緊張によって神経は不安定となり、最も悪性の慢性不眠症にとりつかれた」「休養も鎮静も祈りも効なく、ついにわが前に開かれたのは故国への道のみとなった」のである。十字架を仰ぐ神の子に対して、神は何というおかしな報いを与え給うたのだろう。地上の物質的幸福などは一切取上げ給うもよろしかろうが、せめて安らかな眠りぐらいを許し給わなくて何の神、何の信仰だろう。「神は我が望むものをすべて与えたもうであらう」という翁の予想に反して神は、すべてはおろか眠さえ与えなかった。義と

せられた者が神から受くる恩恵として翁が列挙したものを、回心の翁が殆ど神から受けなかったことの何という奇妙さ。

2. それ一人の人によりて罪は世に入り

ロマ書第5章12節である。「また罪によりて死は世に入り、凡ての人罪を犯しし故に、死はすべての人に及べり」と続く。ひとりの人とは言うまでもなくアダムであり、「罪は世に入り」の罪とはアダムが神の禁を破ったことを指す。神とは、禁を破るとは、アダムとは、と詮議をはじめると問題は果てしもなく面倒なことになって来るからといって、ここの所を、古代の神話をパウロが説法的手段に用いただけのこととして素通りしてもよさそうだと思うのは素人である。キリスト教は、なかなかそんなことでは済まされてはくれない。翁の注解を見よう。

これについて古来より注解または解説の試みられたことは幾ばくなるを知らず(略)ここには細密なる注解にわたるを避けて、おもな3点にのみ注意を向け、もって大体の主旨を探ろうとするのである。(198頁)

私もおもな点にのみ注意を向けることにする。

アダムも人類の代表者、キリストも人類の代表者である。神はいずれの場合においても代表者をもって人類に相對した。アダムをもって人類の代表者と見なせし故、その墮罪を人類全体の墮罪と見てこれに死を与え、同様にキリストを人類全体の代表者と見なして、その義ゆえに人類に永生を賜うに至ったとパウロは主張する。すなわち人類の運命は、かかってその代表者の上にある。(198頁)

パウロは代表者という言葉は使っていないが、パウロの解説者たちの間では、アダムとキリストを代表者と見るのが慣例になっているようだから、それは一応認めることにする。問題は代表者という語にどのような意味内容を与えたか、であるがこれについては後段に翁自身の詳細な解説を紹介するとして、ここでは墮罪、死、義、永生などの語について考えてみる。

キリスト教大辞典によれば、「本来あるべきでないもの」が「悪」であり、その「悪」が神との人格的關係において「罪」となるのだそうである。成程と

納得する人は極めて稀であろう。「本来あるべきでないもの」というが、べき、べからずを判定する基準がはっきりしないから、茫漠として掴みどころがない。神との人格的關係というが、アダムと神は親しい間がらにあったとしても、今日の人間と神との人格的關係となると話は大きく違って来るであろう。クリスチャンは教会で祈る時神を呼ぶ。あの時に人格的關係が成立しているのか。ずいぶんいい加減なクリスチャンもいるが、それでも人格的關係は成立するのか。「する」と言われても俄かに承服しがたい。教会に集まる奴は屑ばかりだと内村翁も言っている。神を呼ぶ資格は、信仰によって義とせられた人だけが持っているのだそうだが、その信仰の内容は問われないのか。屑でも信仰していれば神を呼べるのか。そもそも「信仰している屑」というものが有り得るのか。信仰すると同時に屑ではなくなるのではないか。

さて、ここでアダムの墮罪という問題に、ほんの少しだけ立ち入って見よう。アダムが禁を破ったとか、神の愛に背いたとかいう所謂「アダムの墮罪」は「神との調和の破れ」と言い換え得る性質のことのようである。神との間に調和を欠き、アダムの心に不安が生じた。なぜ調和が破れたか。善悪を知るの木の実を食べたから。善悪を知るとは自意識をもつことだと解してよさそうである。過去を顧み将来を思う知能を持ったということであろう。人間は将来を思えば殆ど必ず不安を持つ。黙示録的将来は別として、明日の食糧の確保から始まって、将来の不安は限りが無い。不安は神との不調和の結果でもあり原因でもある。人類は将来を考え得る知能を得ると同時に不安の世界へ投げこまれた。これが樂園追放の意味らしい。(エリヒ・フロムもこのように解している。) 樂園は人類が人間になる前に住んでいた調和の世界である。人間がまだ動物だった頃の世界である。知能を持つことによって人間は将来を思い、不安を抱き、その結果動物の世界を追われた。動物には将来を思う知能が無い。従って不安も無い。従って罪もない。罪とは不安の別名と言っても、ほぼ誤り無いと私は考える。(兇悪犯人で不安のない男が時々いるようだが、あれは罪が無いのか。然り、宗教的な意味では罪が無いと言っていい。宗教上の罪は自覚された時にのみ存在する。兇悪犯人の罪は社会の規範に背く行為という意味での罪すなわち犯罪なのであって、宗教

的には罪ではない、罪の影のごときものだ。宗教上の罪は自覚された時のみ存在するから、そして罪の自覚は徳の高さに比例するから、徳の高い人程罪が深い、という一見奇妙な結果が出て来る。親鸞上人が自ら称して罪惡深重の凡夫と言ったのがそれである。)

のちにイエスが回復した楽園は、アダムの楽園のような動物の国ではなくて、人間の国である。この国で生きるには神によって義とせられねばならない。エデンの園では人間はまだ動物の域を出なかったから、神と調和するのに義は不要だったが今度はそうはいかない。義とせられるには悔い改めが必要条件である。(これがイエスの在世中は十分条件でもあったが、パウロが世に出てからは、これだけでは不十分だということになった。この上更に十字架を仰ぎ、復活を信じなければいけないことになった。)楽園というものをザッとこんな風に理解していいか。内村翁は楽園についての翁自身の解釈を殆ど示さずに注解を行なっている。訝しいことである。楽園の性質がはっきりしなければ、楽園追放も楽園回復も、その意味はモヤモヤのままだ。楽園を単なる古代のおとぎ話として一笑に付するなら、それはそれで一つの見識だが、そうでないのなら、いい加減なことで済ましてはいけないであろう。深い意味を盛りこもうと思えば限りなく盛りこみ得る不思議なおとぎ話なのだから。

ところで神はアダムの墮罪を人類全体の墮罪と見て、これに「死」を与えたという。「死」とは何だろう。肉体の滅びを言うのだろうか。内村翁がこのすぐあとで「神はキリストを全人類の代表と見なして、その義ゆえに人類に永生を賜うに至った」と説いている所を見ると、「死」は「永生」に対応する語のようである。永生とは肉体が永久に滅びない事を言うのではないことは、恐らく何人も否定しないであろう。とすると「死」も又肉体の滅びのことではなくて、魂の死のことだろうと考えるのが正常な頭脳の下す判断であろうと思うのはキリスト教を知らざる者である。キリスト教というのは、そんな常識ではかされるような生易しいものではない。キリスト教大辞典にもう一度相談してみると、

……古代イスラエルにおいては、長寿は神の祝福であり、夭折はその反対であると考えられていたが、まだ死を罪に対する刑罰として受けとっていたわけではない。死が道德観念と結びつけられ(箴11.19その他)さらに宗教的観念として罪と結びつけ

られるようになったのは、長い歴史的発展を経てであった。死が罪に対する刑罰として明確に把握されているのはパウロにおいてである。すなわちパウロによれば、死はアダムに対する刑罰として世に入り、各人もまた、おのが犯した罪の故に死に服せしめられたのである。(ロマ5の12) なぜなら罪の支払う報酬は死だからである。(ロマ6の23)

長寿、夭折などと並べて死を問題にしている所を見ると、この「死」は、正に肉体の滅びを意味するものと、この解説者(土居真俊氏)は考えておられると見てよさそうだ。パウロは本当にそのつもりだったか。もし本当にそのつもりだったとすると、その幼稚さは話のほかである——と思うのは素人の浅はかさであるらしい。

神は樂園でアダム夫婦が子を生むことを期待していたことは、生めよ殖えよ地にみてよと言ったことで明らかである。地に満ちながらいつまでも死ななかつたらどうということになるか、思っただけでも身の毛のよだつ地獄が出現するだろう。だが、死が罪に対する刑罰だなどということが途方もない出鱈目であることは、これだけでも明らかだと思ふのは素人であって、今日の新進気鋭の聖書学者高橋三郎氏の「ロマ書講義」は次のように説いている。

「今では死の運命を免れ得る人は一人もない為に、人間が死ぬことは当然のできごとであるように人は思うかも知れない。しかし神の創造し給うたはじめの状態においては、人間は死を見ることなく、永遠に生きることが可能であったのである。このことによって「死」は、人間存在に必然的に付随している事がらではなく、むしろ本来有り得べからざることであったのに(人の罪の故に)全人類におそいかかったのであることが分る。」(ロマ書講義II73頁)

内村翁の注解では、「死」は肉体の滅びのようにもとれ、魂の死のようにも取れるような曖昧な書き方をしているが、高橋氏は思う事をズバリと言った。立派である。曖昧な書き方をしなかったその事は実に立派であるが、言っておられることの内容には、いかに何でもついていけない。この考えを正しいとして受け入れなければクリスチャンになれないとすると、今日キリスト教が衰弱の一途をたどっているのも、理由のないことではなさそうだ。宗教は論理を超えたものではあるけれど、それは、こんなことを指すのではないのである。

イエスは、このような途方もないことは言わなかった。奇跡は行なったが、奇跡はすべて、イエスの人格に打たれた人々の驚異の表現として説明できないことはない。イエスの説教には、不思議なほど狂信の影がなくて、お説まことに御尤もなものが多い。異常なのは寧ろ弟子達の方である。このことは我々に何かを示唆してはいないか。時間をかけて検討するねうちがありそうだ。

さて次は「代表者」である。内村翁の注解に曰く、

次にわれらに知らるる明白なる一事は、人類の共同責任 (solidarity) ということである。これは学問上の問題ではなくて人生の実際問題である。事実の上において人類の共同責任は厳として存している。(略) これより脱せんと努むるも、人は到底脱し得ないのである。見よ一家において、その戸主の所業または現状は家族に影響を与えるではないか。戸主はその家族の代表者である為である。同様に町村長の言行は(略) 県知事の言行は(略) また大臣あるいは使臣は、国民の代表である故、その言うところ、おこなうところは全国民に必ず影響し来るのである。

長いが実に興味深い注解であるので割愛するに忍びない。段落の切れる所まで引用する。

戦争の破裂せし場合の如き、国民全体の受くる災害は非常であるが、しかも彼ら自身が直接種をまいたのではなくて、主として大臣の政策または使臣の行動が開戦に導いたのである。ある事をなすのは代表者であって、その結果を受け責任を負うのはすべての人である。これを不公平としてつぶやくのは人の自由である。しかし人類社会がかかると原理の上に成立している事実は明らかに認められねばならぬ。

だからアダムの墮罪によって我々が罰を受けるのもやむを得ぬというわけである。

神はまず始祖アダムを代表者として作りたもうた。彼をもって、その後に生れるべきすべての代表者と見なしたもうたのである。アダムは罪なき者として作られた。彼がもし原始の聖潔を失なわなかったならば、人類は彼にありていかに祝福されたことであらう。(略) しかしながら彼は妻と共に罪におちいりて、人類の代表者たる責務を汚した。神はやむを得ず彼に死の悲しみを与えた。人類は一にして総員の共同責任が存する以上、これは実にやむを得ざることである。(201頁)

アダムを人類の代表者と呼びたければ呼んでもよからうが、その場合の代表者とは大臣や大使が国家の代表者だという意味の代表者ではないことは言うま

でもなかろうと考えるのは異教徒の軽率な即断であるらしい(ユダヤ教信者はアダムをどう考えるか、キリスト教徒とどう違うかがここで大きなテーマとして浮び上ってくる。) アダムを大臣や大使と同様な意味での代表者と見る内村翁の意識の底には、アダムの子孫たちが「罪なくして」楽園を追われているという前提がある。そして、罪なき者が罰せられる不合理を合理化しようとして知恵を絞った結果、「代表の原理」なるものを持ち出した。だが、さきにもちょっと触れたように、この「代表の原理」なるものは実は内村翁の独創ではなくて、欧米の注解者も大体同じような説明をしているようだ。独創的な人のように世間から見られている内村翁が案外独創性に乏しかったことは、大いに注目されて然るべきことであろう。独創とは殊さらに異を立てることではない。己の魂の奥底から湧き出る言葉だけに従おうとすることである。その言葉が在来の思想と同じなら、在来の思想をそのまま採るのも又独創にほかならないが、内村翁の言葉は果して魂の奥底から湧いて出たか。

罪なき者が罰せられる不合理を合理化しようとして代表の原理なるものを打ち出した内村翁は、しからば人類は本来罪なくして楽園を追われていると考えているか、というと、そうでもない。翁はその著作の到る処で「罪人われ」という言い方をしているし、人間はことごとく罪人だとも繰り返している。いつから罪人になったか。アダムの時から? アダムの時に人類は二人しかいなかった。この私はいつから罪人になったか。生れたときからか。赤ん坊は罪人か。そうだという説がある。そうではないという説がある。

罪とは、少なくとも宗教的には、自覚された場合にのみ存在すると私が考えていること前に述べた通りであるから、私見によれば、自覚の無い赤ん坊に罪はない。然らば、いつ頃から罪の自覚が生じるか。個人差があって一様でない。一生涯自覚することなく終る善人も少なくない。(善人なほもて往生す、いかにいはんや悪人をや、という言葉は、罪の自覚と善悪の関係を初めて理解できる。) 赤ん坊や生涯赤ん坊と同程度の反省能力しか持たない善人たちは、厳密な意味で人間ではない。人間になる可能性をはらんでいる動物である。しからば彼らは動物扱いにさるべきか。滅相もないこと。赤ん坊は赤ん坊として遇せられる

べきである。善人は善人として遇せられるべきである。(厳密な意味での人間は現実には殆どいない。)

人間は成人すると罪の中にいる。「アダムが代表して罪を犯したから」、というよりは、「アダムの子孫だから」と言った方がよさそうだ。アダムとは猿でなくなった人間のことである。自意識を持ちはじめた猿のことである。「自意識は限定と障碍に満ちた世界へと人間を追いこむ」とヨーロッパの大心理学者が言った。このような世界へ追い込まれることが、すなわち、楽園追放である。限定と障害を取り除くことが即ち楽園回復なのである。回復された楽園はエデンの園とは全く性質の異なった世界だ。

さて次はいよいよ代表者イエス・キリストである。翁曰く、

しかし共同責任の原理は人類に災いのみをもたらさなかった。代表者の罪によって死を受けし人類は、ここにまた代表者の義によって生を受くるに至ったのである。神はアダムの失敗を補うべく、そのひとり子を人となして世にくだし、彼を人類の新たな代表者となし、彼をして人類に代って罪の罰を受けしめて、人類の罪を許し、彼をして人類に代って義を成就せしめて人類に永生を得るの道を取りたもうたのである。人類の一体なることと代表及び共同責任の事とを事実として認むる以上は、このキリストの人類代表と彼一人よりして恩恵が全人類に臨みしことの決して不合理ならぬことを知るのである。(201頁)

イエス・キリストが人類の代表だというのも首肯しがたいが、仮に一応認めるとしてもアダムが人類の代表だというのとは全く意味が違うだろう。それを無造作に一緒にして、「一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、まして神の恩恵と一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや」と片づけるパウロ上人にも閉口するが、更にその尻馬に乗って、大臣が方針を誤ると国民が苦しむ、大臣が賢明だと国民が助かる、そのように、と言って済ましている内村翁にも困ったものだ。そもそも神の許しというものは、罪人以外の方が罪人に代って詫びることによって得られるわけのものではなからう。私の罪は私が悔い改めない限り許されるわけがない。イエスもそう言った。「皆さん悔い改めましょう、悔い改めさえすれば、そこに天国があるので」と言った。(あれはそんな意味じゃない？ その話はあとでしよう。) 私の十字架

による贖いによって皆さんは救われます, などとは一度だって説きはしなかった。なぜキリスト教の人々は, イエスの言葉をさし置いて, パウロの奇妙な主張にばかり耳を傾けようとするのだろうか。(共観福音書の「過越の食事」世にいわゆる「最後の晩餐」におけるイエスの言葉が「十字架による贖い」を指すものか否かについては別の機会に論じたい。)

—1973年9月—

Notes on Kanzô Uchimura (No. 8)

Mototeru Iwaya

Another attempt to get to the core of the comments on the Bible by Kanzô Uchimura (1861~1930), one of the most popular Christian preachers Japan has ever had.

Part 1: Taking up his comments on the 1st Section of the 5th Chapter of the *Epistle to the Romans* we have made it clear that his comments, wandering far from the contents of the Epistle, show, as usual, his extreme subjectiveness and waywardness. He says, for instance, the 1st Section of the 5th Chapter is the repetition of all the previous chapters. Does anyone agree with him—anyone who has read the text carefully? At the beginning of the 5th Chapter, St. Paul says “As we are now made just by our belief in Jesus, we are at peace with God through Lord Jesus.” Where are all the previous chapters repeated? In the 4th Chapter, as everyone knows, the belief of Abraham is extolled

as a model of the perfect belief. St. Paul does not refer to the name of Lord Jesus except in the last few lines, which are put there just like a drop of oil on the surface of water. How could Uchimura conclude the 1st Section of the 5th Chapter to be the repetition of the previous ones?

Then we present another question as to whether or not the applause of Abraham, who was not a Christian, leads to the denial of Christianity, quoting Uchimura's "declaration" to the effect that he would rather be a man like those Japanese sages, none of them a Christian, of whom he had written some biographies, than be a Christian as he was. Isn't this declaration extraordinarily drastic, set forth by a man who gave sermons all his life, telling the people that man could not be made really happy except by his belief in the death of crucified Jesus Christ?

Part 2: Here we take up his comments on the Section 12 of the same Chapter. Regarding Adam as the representative of human race, he tries to show why we are punished by God and driven away out of the Paradise or doomed to death, without doing anything wrong. His interpretation of the word "representative" seems to be too absurd for us to accept.

We want to know what "Adam" is, what the "Paradise of Eden" stands for, what the "driving away out of the Paradise" means, what the meaning of "degradation", and so on, but, strange enough, Uchimura does not refer to those questions at all.

The story of Adam and Eve driven out of the Paradise is no doubt a kind of "maerchen," but anybody can put into it the deepest meaning of life he has found through his experiences. We can see by the meaning he puts into it, what kind of man he is, how deep and sincere his

belief in life is. Uchimura, however, *has* put into it almost nothing to our disappointment.